

平成22年 6月10日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
 研究期間：2008～2009
 課題番号：20820040
 研究課題名（和文） トポロジカルな比較環境文学研究の確立——冷戦期の日米作家を中心に
 研究課題名（英文） Comparative Studies of Environmental Literature: A New Approach to American and Japanese Writers and Artists in the Cold War Era
 研究代表者
 波戸岡 景太（HATOOKA KEITA）
 明治大学・理工学部・講師
 研究者番号：90459991

研究成果の概要（和文）：

トマス・ピンチョンと大江健三郎は、第二次大戦後の世界文学における中心的役割を担ってきた。しかしながら、両者を対象とした比較文学研究はまだ十分になされてきたとは言えない。本研究では、両作家およびその同時代のアーティストを対象に、彼らの仕事に通底する、トポロジカルかつ環境論的想像力の在り方を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

Though Thomas Pynchon and Kenzaburo Oe are major figures in the world literature after WWII, it is rare to examine how their works are sharing the vision of the eco-conscious future. Critiquing writings of the experimental novelists and works of their contemporaries as well, this project has successfully clarified how their works are using their topological, environmental imagination to get the depth.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,330,000	399,000	1,729,000
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,530,000	759,000	3,289,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：各国文学・文学論

キーワード：英米文学、比較文学、文学論

1. 研究開始当初の背景

1990年以降に本格化したエコクリティシズムは、21世紀にはいり、より多くの作家やアーティストの仕事を対象とするようになった。しかしながら、ポストモダニズム文学や、あるいはアニメーションのような大衆文化を射程にいれているものは少なく、本研究で

は、その欠落を埋めるようにして、比較環境文学という新ジャンルにおける、トポロジカルな文学批評を目指した。

2. 研究の目的

本研究では、世界的潮流となった環境批評の視点から、従来は環境問題と結びつけられて

論じられることの少なかった日米の代表的な実験小説家である大江健三郎とトマス・ピンチョンの二大作家を核とし、研究対象としてはより広く、その同時代作家およびクリエイターたち全般を対象とし、比較文化論的立場から、これら戦後の日米文化における「環境意識」の表出を検証していくことを目的とする。

3. 研究の方法

(1) ピンチョン、大江、そして彼らの同時代アーティスト（ポストモダン文学者からジャパニメーションまで）を対象とし、彼らの「森」をめぐる表象実践を比較分析した。具体的には、(2)と(3)のようなテキスト群を精査した。

(2) 国内作家・アーティスト

大江健三郎『M/Tと森のフシギの物語』

同『同時代ゲーム』

同『「雨の木」を聴く女たち』

同『いかにして木を殺すか』

同『燃え上がる緑の木』三部作

同『洪水はわが魂におよび』

同『静かな生活』

竜騎士07『ひぐらしの鳴くころに』

丸谷オ一『樹影譚』

古川日出男『聖家族』

同『アラビアの夜の種族』

横溝正史『八ツ墓村』

同『犬神家の一族』

今井智己『光と重力』(写真集)

《映画》

『もののけ姫』(アニメーション)

『秒速5センチメートル』(同)

『八ツ墓村』(実写版)

『静かな生活』(実写版)

『ひぐらしの鳴くころに』(実写版)

他

(3) 国外作家・アーティスト

トマス・ピンチョン『メイソン&ディクソン』

同『ヴァインランド』

同『重力の虹』

同『スローラーナー』

ケン・キージー『サムタイムズ・グレート・ノーション』

カート・ヴォネガット『スローターハウス5』

アニー・ディラード『リビング』

ゲイリー・スナイダー『終わりなき山河』

《映画》

『ブレア・ウィッチ・プロジェクト』

『ドッグヴィル』

『ヴィレッジ』

『スローターハウス5』(実写版)

『サムタイムズ・グレート・ノーション』(同)

他

(4) 国内フィールドワーク (四国)

国内のフィールドワークでは、おもに大江健三郎の生家近辺を、大江のテキストと比較を検討しながら写真に記録し、先行研究である大隈満『大江健三郎研究』①②と照らし合わせることで、フィクションとリアルの峻別をした。そのうえで、現地の関係者にインタビューをすることで、大江健三郎の「都市」と「森」に引き裂かれた主体を、伝記的要素から浮き彫りにした。

さらに、大江の義兄である伊丹十三記念館を中心とする伊丹関連の調査では、このマルチタレントの人生から大江の立ち位置を逆算することで、伊丹の映像と大江の小説、それぞれに描かれるフィクショナルな「森」の表象の意図を割り出した。

(5) 海外フィールドワーク (ロサンゼルス)

主に、ゲティー美術館とウェスタン博物館で文献調査をすることで、ホイットマン以来の伝統にある、ビート世代やスナイダーに端を発し、ピンチョンの『ヴァインランド』やキージーへとつながっていくアメリカ西部の森＝レッドウッドの表象を系統的に精査した。また、西海岸に独特の植生と、ピンチョンのカリフォルニア三部作の主要な舞台である海岸線を、テキストにあるような経路で走破することにより、ポストモダン文学をネイチャーライティングのように読むための実際的な「経験」を手にした。これは、エコクリティシズム(環境批評・研究)における「ナラティヴ・スカラシップ」(語りの実践研究)と呼ばれる、一般的なデータ重視の研究成果というよりむしろ、批評テキストそのものをエッセイに近づけたかたちとして結実していくものである。

4. 研究成果

(1) 「語り」の検証

二度にわたる国内フィールドワーク(大江健三郎の生家一帯)と一度の国外フィールドワーク(ピンチョンを始めとする、西海岸文学と呼ぶべき作品群を生み出したロサンゼルス一帯)を通じ、環太平洋という大きな枠組みから日米の冷戦期の文学的想像力を検証し、結果として、ポストモダンの主体にある作家・アーティストたちが、自らを「都市」と「森」の両方に引き裂かれるものとしてアイデンティファイし、その両極への環境意識を先鋭化しつつも、一方で、あえてその意識を宙づりにすべく、ループ構造をもつナラティヴを採用していたということが論証された。

(2) 日米作家のトポロジカルな比較研究
ピンチョンと大江を比較する際、彼らのテキストに召喚される「森」や「自然」の意味あい、一義的には「近代都市文明」への対抗物であり、二義的には「ホイットマン以来のアメリカ型民主主義」の実践であるということが、「現実の森」を記録し物語化するネイチャーライティングたちとの比較において、両作家の「虚構の森」が、それぞれの森（大江は四国、ピンチョンはカリフォルニアのレッドウッド）をあくまでも「歴史」のうちに語りながら、「現実の森」が被った変化（四国の森のスギ・ヒノキといった商品化や、レッドウッドの国立公園化など）を意図的に排除したうえで成り立っていることなどの調査により明らかになった。

この研究の一端を担うピンチョンの自然表象については、2008年11月に武漢で開催された国際学会で発表された。

(3) 大江健三郎とビート世代の比較研究
大江健三郎は、創作および講演のふたつの「語り」のなかで、「ビートニクの代表として一時代を劃した詩人」アレン・ギンズバーグに言及している。本研究はこのことにも注目し、彼らがかかわす「俳句／ハイク」のなかに立ち現れる「自然」と、そのエピソードの裏で展開する「樹木」および「森林」への日米作家それぞれの態度を明らかにした。

尾崎真理子のインタビューによっても確認されるように、大江はギンズバーグとハワイ大学で一九七七年に相見えた。しかしながら、小説に描かれた「ハイク」をめぐるやり取りは、どうやらこのセミナーに先立つ一九六八年の出来事を踏まえているらしいことが、二〇〇七年に再版された『核時代の想像力』（一九七〇年）を読んでいると明らかになる。

一九六八年にアレン・ギンズバーグから大江に手渡されたというケルアックの俳句と、一九七七年のハワイ大学で「アレン」が紙ナプキンに挿絵付きで書き付けたというハイク。この二つの俳句／ハイクを並べると以下のような。

In my medicine cabinet,
The winter fly has died of old age.

Snow mountains fields
seen thru transparent wings
of a fly on windowpane.

どちらも蠅(fly)と冬(winter, snow)を主要なモチーフとして使いながら、前者はそれが「薬棚」のガラスに（薬箱や薬籠では、洗面台の上につくりつけてあるキャビネット

の感じがでないばかりか、なぜそこに生命力のもとと弱い冬の蠅の死体がくっついていなければならないのか説明がつかない）、そして後者はそれが家の窓ガラスに張り付いているという違いがある。

仮に後者を大江健三郎による完全なる創作だとするならば、それはケルアックの俳句に、観察者としての詠み手の立ち位置を明らかにすることで、詠み手→蠅→羽根→ガラス→雪山、という遠近感を付与しえたものだといえるだろう。このとき、ケルアックが詠んだ「薬棚での蠅の死」によって醸し出される「孤独なやり切れなさ」とでも言うべきものは、それがあくまでも「雪山」を見るための透明な膜へと最定位されることで、また別種の叙情を俳句／ハイクに与えることとなるのだ。

このように、「現実」と「虚構」をたくみに使い分ける大江の語りにおいて、ここで対象となっている「頭のいい『雨の木』」という短編においては、「蠅の羽根ごしの雪山」というヴィジョンと、短編そのものの主題である「総体を見ることの叶わない樹木」というメタファーのあいだに、山並みと樹木という、コントラストが見て取れることを本研究は明らかにした。

大江によって改作されたケルアックの俳句は、きわめて視覚的なパースペクティブを与えられた「かれ[アレン]のいういわゆるハイク」として、すなわち、西欧的な風景概念にもとづく世界の見方として、日本からの訪問者である語り手の世界観と対比されるのである。かように、樹木一本すらまともに見ることなく、代わりにその樹木の生み出す「暗黒」の方に壮大な時空間を垣間みてしまう「俳句の国の小説家」たる語り手は、このパーティーが精神病患者たちの壮大な茶番であることが明らかになっても、さらには事件の発覚以来ずっとそれを笑い飛ばそう努めていたアレンがついに「思いつめた憂い顔」となってしまっても、みずからは冷静な傍観者としてふるまい続ける。

短編の最後、アレンらとともに乗り込んだ小型バスでの逃走劇が果たしていかなるものであったのかは、もはや語り手の興味にはない。彼はただ、結局さいごまで見ることもなかった樹木のことを、感傷的なそぶりを装いながらも、後悔とはまったく異なった口ぶりで回想するのだった。

本研究の成果の一部は、2010年8月の文学・環境学会の全国大会にて発表される予定となっている。

(4) 日本作家のジャンル間の比較研究
「自然との共生」という理想を前近代的な日本の姿として措定し、だから明治維新後の日本の近代化とは〈私〉が〈自然〉に対して確

固たる対立構造を築き上げていくプロセスだったのだと主張してみると、それでは近代がポストモダンへと変容していく過程において——それはすなわち高度経済成長期とそれ以後ということだが——、文学からアニメ、さらにはPCゲームやライトノベルといったものからなる現代日本の表象文化は、〈私〉と〈自然〉の関係というものを、いったいどのように描き出してきたのだろう、といった観点からも、本研究はその「森」の表象を中心に、異なるジャンルの作家・アーティストの比較研究を行った。

あらゆる〈自然〉は都市生活者のための記号に過ぎないとするアマチュアなポスト構造主義的見解にたよることなく、二十世紀後半から現在に至るまでの環境意識の表れとして諸々の文芸作品を読みなおしてみるならば、そこでは〈私〉という主体が一枚岩なものではないことが自明視され、〈自然〉という概念が「環境」や「生態系」という関係性そのものを意味する用語にとって代られてしまい、そうしたことの結果として、〈私〉と〈自然〉を対立項として捉えること自体が、今日ではきわめて時代錯誤な思考と見なされるようになってきたことが明らかとなった。

そうした現象の代表的な事例として、大江健三郎『M/Tと森のフシギの物語』、宮崎駿監督アニメーション『もののけ姫』、竜騎士07ゲーム・小説『ひぐらしの鳴くころに』という、畑違いの、それでいて地域としての「日本」あるいは「アジア」という括りを自覚的に背負いこんでいると思しき三人の男性作家を比較した。これらは共に〈森〉をその主要な舞台に定め、そこで展開する物語はいずれも、森に囲まれた周縁の閉鎖的共同体が中央からの近代的価値観によって蹂躪され、挙句に窮鼠猫を嘯むようにして捨て身の反撃を行うといった筋立てをもつ。

周縁と中央。その図式は同時に、自然と文明、地方と都市、前近代と近代、さらには命と経済というさまざまな二項対立を物語に呼び込んでいく。だが、すでに述べたように物語の創作者にして傍観者でもあるところの現代作家たちは、そのいずれかに与することをよしとはせず、ただただ「引き裂かれた主体」であり続けようとする。大江健三郎のノーベル賞受賞スピーチのタイトルをもじるならば、その「引き裂かれた主体」とは「日本の森のあいまいな私」とでも言うべき存在であることを明らかにした。

本稿は、2010年6月刊行予定の『水声通信』に発表される予定である。

(5) 「接地」と「俯瞰」の感覚について

横溝正史の『八ツ墓村』には、小説、映画、劇画という異なるジャンルが存在する。この

とき、その視覚的・感覚的な「森」の把握の仕方にこそ、同じく複数のジャンルを越境するピンチョンの創作技法や、あるいはテキストの語りなおしによって読者のイメージのうちにある「森」を更新し続けていく大江健三郎のナラティブ論を、より広い文脈におけるトポロジカルな環境表象論として成立させる契機が含まれていると考えた本研究は、結果として、『八ツ墓村』の犯人である女性が、最初に「村」と「森」に言及するシーンが、各ジャンルによって決定的に異なっていることを突き止めた。

そこにある「接地」と「俯瞰」の感覚の活用は、『ブレア・ウッチ・プロジェクト』のような主観的撮影方法から、『ドッグヴィル』のような舞台上の抽象表現、さらには『サムタイムズ・グレート・ノーション』での俯瞰といった「森林表象」の、ナラティブ上の意図と効果を定式化しうるものであった。

この研究の一部は、2010年3月にジュンク堂池袋店で行われた、作家・古川日出男とのトークショーにおいて発表された。

(6) まとめ

以上のような、多作品をそれぞれの方法論を駆使しつつ読み解いた本研究プロジェクトは、その総体として、「森林表象」によって明確となる、トポロジカルな比較環境文学研究の確立に寄与することとなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

①「日本の森のあいまいな私」(単著、波戸岡景太、『水声通信』2010年6月号掲載予定)

〔学会発表〕(計3件)

①“Setting Free the Dogs: Thomas Pynchon’s Environmental Imagination”(単著、波戸岡景太、2008年11月8-10日、The International Conference on Literature and Environment, 武漢、中国)

②「オープンスペースを誰が歌うのか? ネヴァダのネイチャーライティング」(単著、波戸岡景太、2009年6月7日、第43回アメリカ学会年次大会、於・津田塾大学)

③「日本の森のあいまいな「私」: 大江文学から、宮崎アニメ、『ひぐらしのなく頃に』まで」(単著、波戸岡景太、2010年1月10日、国際シンポジウム、於・立教大学)

[その他]
ホームページ等
<http://kaken-hokoku.blogspot.com/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

波戸岡 景太(HATOOKA KEITA)
明治大学・理工学部・講師
研究者番号：90459991